



金刀比羅神社

鎮座地：千葉県館山市川名新町七五三の一

祭神

大物主神
おおもものぬしのみこと

宮司

石井三千美

例祭日

七月九日

由緒

金刀比羅神社は、江戸時代末期に四国からきた漁師たちが「海の神様」として漁業航海など海上の安全の守り神である大物主神を祀る金刀比羅神社を船形のひとと協力して建てられたと伝わっています。



その後、四国から神宝を移し、地区民により何度か修復されて現在に至っています。

手水舎は天保十五年（1844）五月に奉納されており、大鳥居の前には、大正十年に建てられた「琴平神社」の石碑と、「四国之本社御分離 昭和二十四年七月十日」と刻まれた「金刀比羅神社」の石碑が両側に立てられています。



「四国之本社御分離昭和二十四年」と刻まれた「金刀比羅神社」の石碑



大正十年に建てられた「琴平神社」の石碑



拝殿扉にある紋

社殿は内削ぎの千木に七本の鯉木をのせた堂々とした神明造。拝殿の二枚の扉には金で塗られた「〇に金」の文字が光っています。

山の中腹を切り開いて造られた小高い境内地からは鏡ヶ浦が一望でき、昔から川名の人々の篤い崇敬を受けてきた歴史を感じさせる風格のある神社です。

自慢の祭

川名区は、青壮年会を中心に会長が祭礼委員長を務め、区や子ども会等、区民が一体となって祭を盛り上げ、準備から片付けに至るまで取り組んでいます。

元々は船形地区の総氏神である諏訪神社の例大祭と、川名地区の氏神様である金刀比羅神社の祭礼は別に行われていましたが、現在では船形地区の五地区とともに諏訪神社の例大祭に大山車を出祭しています。宵祭の日中には小出車も区内を所狭しと曳き廻され、届けられたお囃子の音色が街中に響き渡ります。

金刀比羅神社の祭礼も毎年七月九日の金刀比羅神社祭礼も宵宮の夜、行事の潮ごりを青壮年で神社から砂浜間を三度甚句を歌いながら裸足で行います。

祭礼前には、金刀比羅神社の社務所にて太鼓の練習が行われ、以前は「浜友会」という子ども達の太鼓の会が活動していた時期もありましたが、今は青壮年会を中心に、ほかさんざり・速ばか・大漁節等のお囃子子ども達に教え伝承を伝えています。



木遣りの後の威勢のよい曳き廻し



2尺の太太鼓が鳴り響く

特に合同曳き廻しで他地区とお囃子で競り合う時や、坂道を上がる時の木遣りの後の曳き廻しでは、威勢の良い速ばかを叩くのが特徴です。

川名区では木遣りがこよなく愛され、多くの歌い手が自慢の喉を披露して祭礼に趣を添えます。昔は我先にと大勢が同時に歌い始め、最後に残った者がその時の木遣りを取るという競い合いや、引き綱の両側で交互に歌い合い、一方が「あざが付くほど、つねつておくれ、あとでのろけの、種にする」と歌えば、もう一方は「あざが付くほど、つねつてみたが、色が黒くて、わからない」と返し、都々逸（どどい）つのような楽しみ方は川名区らしい深い味わいを感じさせます。

また宵祭での、川名・船形地区側の川名区と根岸区、隣り合う那古地区側の濱組と寺赤組との間で互いに交わされる「提灯迎え」の挨拶は、現在でも大切な伝統として継承されています。



伝統として継承されている「提灯迎え」の儀式

漁師町として威勢が良かった川名区の祭礼と、立派な山車を今に伝えつつ、神社紋と同じ天狗の羽団扇の半纏の大紋もそのままに、威風に満ちた自慢のお祭りです。

船形諏訪神社の例大祭

祭礼日 七月第四土曜日・日曜日



浜出しで勇壮な曳き廻しを行う川名の山車

船形地区の総氏神である諏訪神社の例大祭には、川名、大塚、堂の下、浜三町、柳塚、根岸の六地区から、山車、屋台、御船が出祭します。

昭和五十年初め頃までの船形祭礼の見せ場は、なんとと言っても山車を砂浜に入れて曳き回す「浜出し」でした。山車の前車輪部に丸太で組んだやぐら入れ、持ち上げては引つ張り、また持ち上げては引つ張るの繰り返しが引きずり進みます。屋根の上では大漁旗が威勢よく振られ、船形の漁師たちの熱い心意気あふれる、その光景は勇壮かつ豪快で、担ぎ手、引き手、観客が一体となった感動の連続でした。しかし昭和五十二年、この浜に防波堤が作られたため、六地区が競った浜出しができなくなり、昭和六十二年堂の下区が行った浜出しが最後となりました。

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。